描き道人稿

鉛山玉石異訓 初編 下

岡丈記操觚

鋸山玉石異訓初編巻下

東京　猫々道人原稿

岡　丈紀操觚

○第三回

案下再繞茲ハ又ハ勝ハ同之巫英佑ハ富寺の門前ハ
幸藏一族の帰りと伺ち群集の人〻右往左往ハ罵れ
立て迯去るハ尋常なりぶと同之巫ハ迯来る者ハ子
細と問ハ彼者ハ狼狽なりし辞急迫く今八秒のお取

A558
2
48-2234

締ぐ人の博奕よりと入とられ大賊元の幸義親ぶん
を絶ぶるの口実も衾を捕れて賭博場に潜伏久る又
騒動と色り過るとお務も関付け備い親分子分の元も
かを捕よあられしろモシ千葉の小先生素も貴郎も虚と
此愛らよ岳べ連累されぎよ縄めよ羅るい必定一
先危難を避るよい両刀の武家打拾人目よ不審を生ずる
基おといれて左ありと周ら迄を疾く大小拵を抜て
ひとつよ押ぎるめ傍への嵯よ投込ミて後同行ふと又

間蓄末義を潜り山路を辿り十月七日の霄月夜弟よ照
添ふ楓葉と行途の葉間よ其處とも分さぶ南方をさして
乞る程よ一個い甲斐ある婦女の身窮屈さ人も脱棄
て素足よ拾む九形石よ蹴き木の根よ躓び足の指
先磨破り辮血滴ら逆り若痛よ堪ん紀んとしてい
辺もゆう老周ら迄も赤撃叙師とい人鑑ぶてよ似もやち
でお務と等しく労ま果様よ腰ケ茫然ら迄時お
務い哀れ細き声苦を出して周ら迄よ入るやう

小先生いかに職堂が武者修行のお身の上素い江戸の外を足袋柔弱き婦女の山路の危難足の生死測しられぬ最一脚も歩行ません里う強壮へ出るまでハ憚なら貴郎の肩ゑ負擔て連退きなハまと迫る国ド一国ゑ至イヤ撃剣所の武者修行のと心真者と思いれてハ此境ゑ除えて大迷惑最此上ハ化の波顕然ゑ素性氏語りゆきん最早此雲まで追捕も来ぬ後りと想んでお関るされと嬢裏の摺火ゑ出し腰より板

出き煙草入煙管ゑ一服吸付けて お徐ゑさ一出しさて いゑゆう自己ハ小総千葉生れで十二ゑより江戸神田今川橋の陶器店ゑ年季と拵て丁稚奉公去年吉原の出火より遊女屋中の俵宅が市中ゑ出来ぶ身の詰りで角町松田屋の抱え抱女聘緑とい入揚妓ゑ別深初め主人の金と引負ひして駆ぶ落着帳尻の合ぬハ明の十露盤玉露顕ぬうち此方ゑ我身と愚して先つても故郷の千葉へハ帰りいゑ此上侠治と行違途中幸

義親分の一ふり猫突の權六どのゝ不図行衾て幼
稚頃の看知り越ゞ縁の端故助揚らゝ人物紙見立ら
れる撃剣師故郷の地名ゝ由縁ある千葉先生のこ
男と外貌だうの武者修行小先生と崇敬るのゞ賭
博師の御色狂云賭場の亭番と衣裳で盛せ
楽屋の魂胆実い女業の客食兒と居経と関うち
猶い渦息さて い貴郎い尋常の人妻も江戸で蕊疲稼
ぎ冊と一ツよ呑さ頃よ表素通家と素初ゞ者の

親分の助接よ為ゞ冊ゞ病死紙ゞ渡よ江戸を仕舞
て同住れ来る途中ゝて丈と初り恨りしとゞ有ゞも
縁と心中み影念ゞ親分のお地人恨ゝ一日柄もなくゝ人
の危難い旧恩の報ひと知りて葉藏どのと芸よ縄目も
戮いねど僥倖貴郎と惟二個適ゞ一ゝい所周のみい
分盤經の金い絶をゝ金高ゞ駄て居るゞどよ疲労
るゞゝも此山の禁よ下りて旅宿を求め労ゞを休
めて成行の相談をゝてゞ人ゞとゞいれて男を渡

まゝよ自己が実の名い中根半次郎とて齢年い
二十以歳よ及びたゝ汲よ立でも男の甲斐膝とも
徐合が活しの敵多よありて絡つせん誘徐くと立
退うんと後廻山路もか務ゞ多を曳き霜柘時の華
踏分け東方の海色の赤むは幸うドて山路をるだ
疲明と告る山鳥の声と聚りよ仆り坂務く一ッの村
よ出で浪の寄さ人関めるるのゝ此處い行変と地境
の傍示杭ある文字を撫むよ上総国望陀郡久留里領

と紀しなるみを二個い拾ひて一息つた宛ゞ渇
喉の水を得し心地せゝ立く猶ほ丁一筋路伝ひ
く程よ大陽東方よ高く昇りく毎戸門を開く中
軒端比列し城下の市中中よ旅人宿松屋源助と懇め
たゝる招牌を出せし家いさきで造作も看苦しゝ
舗頭よ数脚の床几を据しい黄蘗も鬱ぐ者とな
しく是幸ひと立寄て疲道の疲労を憩いんと中のる
の掾側よ腰うちをれば此家の下牌ゞ混茶よ添へる

梅干み砂糖を添ぎて持来るよ宋次郎いお茶と計り
先ず腹ぎ空腹の腹りよ朝飯の支度と呼吟けい膳よ
對ひているやう我俗いい江戸の者眠鳥笠裏の縄者よ
条脩し部場の十銭よ籠り銭明て加納山より房物浦
よ舟ちんと眠銭彼雲ふ在ー所ろ十銭の市場よ賭博
者多ぎ不意の喧嘩の騒動よ出合ひ逃去る人み有
離りて危くその場と通ーらど不動業内の山道よ
迷ひ仏どもく里ふ出ぎ修銭をとかちなく走行て

漸此里まで来て身体労れ腹さ入堂ーく平塗茶屋果
れだらみの歩ひい適ひ雑ー平朝みづ苦ーらぶい
此辺道筋頻むありと関ろ小婢い家長よ聞く告る
よ男女ど年齢も丈揃ひ人着悪ろねび
迅速よ旅宿を取落ゆるくと休息の人と汚れる二
個ど脚を洗ど せつ奥の別間の口畳ふ座を設け請
ぎるのぞ二個い膳付て朝飯の箸を揃ーらぬ先の愛そ
らー業よ換る村酒の味も互ひよ飲る上戸同士指つ

久留米の旅宿よし勝半次郎行末を商議する図

揮へつ隅心なる此酒宴と喫飯の間よりく打解く
見る先の行途の相状お勝い耻辱より宋次郎ゞ優し
き語次の奴抱と男容貌さへ小絲の垢抜しる江戸育
ち婦女より別し待遇より素より深乳のたゞもまひ藝妓
脱りの真意を顯いし慕ふ心中を服遣ひよ運ゞ素
振い此方も同ゞく宋次郎いお勝ゞ繚致の者より過を
し艶ある姿貌より恍惚とし者られしゞ有繋より美
と自己ゞ言出しるゆて猶縁ゞ仕如ゞ出さ

再び来ぬとよ云ふと膝を進まを仇し口二個を
小のめく薄酔より食事も果して眠乳を催せば暫時
寐所て足の労を休ひ小憩と呼び蒲団
と枕ゞ取寄て一所より設けし床のうちより怪し云美を
ゞ結びる嗚呼云を遠くて近きに男女の仇と故
人も既より比喩しゞ偶然其所我同うし一丈一婦の猿
絆を世の人口より適る者獨柳小惠より肥ざり世ゞ争う
ゞ是紙得べるんや況ま宋次郎お勝の小云放蕩云

頼の浅ゝ深う一婦い深い蔵の蔵脱一丈い主業の
寄食児的ぞ幸蔵の恩義と思ひく家と住む事
の難き西間稲ゝ矢赤蕨と喋へくるが如しとせん狭
間浩休顕義ゝ又お腸本次郎の二間の者い松屋の旅寓
ゝ図らずも邯鄲一時の愛枕怪しい契りと結びしよう交
情忽ち漆膠の離難き雅ゝ念ひ浅生ド手夜い尚家ゝ
一泊の寝物語ゝ行先の分の為義と終合せるゝお務い
異ゝ老母と失ひ生し江戸ゝ帰るとも親戚も絶き

なりぬ分ゝ店父の何某ゝ戸籍い託け亦ども此
も他人の義理交際上絶へ旅立早くゝ戻るとゝ
面伏なれば的変へありと連れて共ゝ活計の資本金
い幸蔵どのゞ充当金二ゝ十両の外ゝ遺の残りも
なれば細くとも当分煙りい立待らん栖べき方い的処ゞ
可き哉と問ゝ答へて主浪郎い因人なゞら長我舵の
幸蔵どの愛妻なる貴婦と共ゝ在んと書面ゝ人婦
なりなゞば据山の境界とゝだ房列路ゝ新古ゝ

我等の知己なり其処と便りて兎も角も分の義差と
計らいんと示し合しつ当暦朝張宿紙を出海亀紙
巳り急ぐ張の小春叶空も長閑よ武蔵潟相模の曲
湾浦くの景色看渉を演侍ひ沖行く船の丈から
で沖り定め波枕志ら悦よ孕む風なりよ色りく
宿り二日目の黄昏須安方国那吉の所よぞ着よけ
る物語涙よ戻りて義よ新妻の十夜の所ゆて石捕
主る長我紀の幸義路ゆるるの者猫実権六久次次

郎右其他一同代官の出張而よ拘引ら是魁首幸蔵を
先年来悪徒を集へ賭博を行ひ賭場の盗延一枚より
隊徒と号け私税よ号しく金銭を強て取立て剥へ三年
前ゆ分よ命じて伝抄を宿然ゆ弟を切害せし人数し
の大罪人ゆ権六も幸蔵の従よ所ゆ引き科人なれ
ども日ゆりぞ江戸の奉行所よ送り出てられ小伯ゆ所
よ入牢して与る長我紀村よ殘しゆる妻子も安居と知
ゆ由なく一年隊り程立て幸蔵権六その他の者も

引續きて牢死せりと風の便りに聞えり此は是
後に解べき筋なれば贅して記せーあり
紀者曰く此一件は徒に安政の始めより維新前に
係る縛りて安房の罪條が晴紀の一文に出るを
以て年月時日判然なりねど是全くの実事に出るは
房総の土人が常に口碑に傳へ彼長我部の幸義
を以て證とせべー

○第四回

安房の國平群郡那古の郷は南方北條館山の城下に近
く東方富山の禁に接ー海岸平坦に属せり殊に通
行の便宜なり初て お勝米次郎は久留里を立て二日目に那
古の町に着ーて或茶店の床几に憩ひ此土地の漁夫
平七が家と同じ茶店の妻が立て手拭を被ぶり町外
に出て漁夫に沿て二丁程行ーて夫の家なるが渠を
今年の八月中旬洲崎の沖へ漁に乗出ー風に逢ひて
紅緒とも漂流ーて沈没ーて生死は知らず歳果て殘

宇山発兄
吉野屋
茶

勝次郎
半
郷の
知り
住む
那古の
茶店
旧
七平
家を
問ふ

るハ六旬ヨ程迫き連合の老媼ひとり老夫どのヨ先ヨ
ミ憑むふもなく親戚もなく孤老の孀婦の生甲斐又なー
と思ひ乙しーふ数程せーゞ間もなく脊戸の古井ヨ身と
投げ金く家ハ断されば彷徨の甲斐ハなーと関く
水次ハ壁こ紙失ひ彼の七平ハ壮年時我等ゞ父なる
千蔡の実家ヨ迄うみこ年なるーロ五十年前頃
村ーて其後わく便りしも朴納なゞう悪心なる老
夫なりーゞ老年夫婦の横るく兆業ヨ死せーハ是

前生の業因と多年殺生の報ひなるん此零生で辛
ね苦りーー上い攻て墓参りして喫へんとその善提所と
尚家ヨ同ひ墓所ヨ行ゞ番華と得人本云なく此地
ヨ家りて其後水次命ハ勝ヨ対ひ打角便りー七
平の死失りと関りハ西岸浦の浦賀ヨ渡り仕業な
りと嘗こて貴婦と長く添遂んとりんヨか勝ハ横多
とおち手浦賀ヨて思ひ出ーこん妾ゞ新掠ヨ芸妓の
頃一年の約定で家へ抱へく芸妓ヨ出ーこ小菊と云

が浦賀港の酒問屋九屋の主個と深く別懇結綏掛ふて
て主客が藝妓を退せ故郷へ連て帰らゝ逆一昨年その
後送りし書笥の便りふ因形の鋪の迫色ふ別宅な
して活計や京江の魚巡り漁舎見物ふへ形栖ふ汚ね
てと偏めがりしい去年の夏あ且を幸ひ便りなべ寄
色の岸とあゝんを知れぎと偽りふ紅の章先活し出
次郎も又それを可なれと翌朝浦賀の便紅を旅宿
ふ頼ふて来也をしが生一族ふて便紅い早くも浦賀ふ

着しくべ二個いか孫て縁故なる小菊の住居を尋ねふ
稍くふして西浦賀の濱町と因称るのゝゝ甚寡ふ
たどりて門口ふり表構へと看てさきふ大商賈の妾宅
ふへ思ふふ遠ふ古家の格傾きし家葺家根若門遠
ひふへがりぬゝと看仰る格子の門口ふ江戸屋きく
と標札を掲されべ来伝半疑ふ立止り二個耳結古
格子の間ふり内をさし覗くふ紡ふ客ふて茶のふ
菊が明り漳ふ紙ずしく開き角匂ふ多り裾の方ふ

小夜衣引ゝ合ひ頻突つたその頃都鄙のうゑ人等ゞ
專ら拍手弄ぶ人情本とゝ呼けたる流行ぐゝ小
冊と外眼もふらぬ憂岳る姿を看るゝ全く此家ぞ
と米次郎を表へ待させ拍子瓦礫雜と明るきよ菊
へ小冊と傍へよさ一搖き進君と声とゝけみゞゝ起
直りてお腹ゞ頼互ひよ看るゝ婦女同士マアく此方
へと夜衣拭かいやり棄て客座へ請ゞ婦さん孫よ
お久しぶり行拍して此地へお出のゝ戸外のお方へお連

と見えるゝ伺も遠慮いたさせん彼方此處へお通入と
再ゝ呼まして米次郎浚獲くも小腰を屈め恐く入ゝ婦
側へ膝打ゝこれバお菊へ強て座敷へ請ぜる待遇中
二個ゞ素振を丈ぞと悔う我ゝ解し親屬交誼粹の
果とぞ知らまゝる却説お菊へ茶を勧め菓子を出し
てお勝ゞ此地へ来りしゝ細を委く問ふよお勝も今更
隠まゝ由なく前へ上総の綱元なる武藤屋幸藤と人
る者の助援よりて活計ゝ尚年の八月母の病死

を安葬後よ芸妓を退されその故郷の上総路へ共よ
連られ行ー處ろ彼幸蔵が網元といひーへ旅宿その
実い長我妹の幸蔵とて賭博師の親分株ろて箇様こと
爾ゝと新場村の捕縛のるよう此末次郎とのふ人と
昔よ其場の危き我通ゑて不思議の中とるり安房
の郷古よ便る方ろー的さん顧客汝が過日尋ねて
来いと書翰の音信を恩ひ出ー以茶の由縁よお逢を
頼こるがう指方を尋ゝれども在家いきれぞ狭い土地ぞ

けやうゝと尋ね尚りー此途居失礼なゞゝ看文さ寄
ふが汝も今でい彼九原の旦那の投助ハ離ゑてこ子と星
を指たるか彼も利者が菊いかー頼赤ろめ婦さんぞみよ
打乃て彼も彼ー生ー的若主年ハ免なさいお撃
ひちをーを結ーませんと吸付烟草の吸口を神よ拭ふて
産傷の半次郎よさー出ー以再びお菓いお膳よ対ひ
面目あへがお茶ー通り去年の秋ぞ九原の旦那
のお投助よ為りて地面内へ新さよ家をへ作つて共ひ

下輝と二個の乳母なる活斗よ且形ゞ偶の機嫌と云るのと外あい何の仕業もなく寄席迄入や芝居又と眺る支体よ拵なまし〜遂欲口の舞辞よ足下かるぬぶらく〜歩行岩戸の拵而の内蔵枝お繃さんとの人人いい茶上物言時で国ド家よ居さ縁うう退屈すると遂びよ行た一に欲で居る処人不図立寄さ主人い妻ゞ婦さんの家よ居さ寄り金春の遂為人九級能を脊中ふ黙さ彩吉とう人使客肌互ひよ学の有寄り誠まんざら初ら

ぬ顔でもるいと指を歯とお繃さんゞ斟酌の様ゆ工合拵ようけさ猫の皮素ら源乳の水潤ふ彼物さんゞ面こ逸の文句よ振る場合の謎解かりたる頓脳を且形拵の身の上と稍く堪へて莫盛吸るを送り狼男と心い後さ場つさ後且形い君の商用で大坂へお点の留ち指り淋しい秋の暮又乳ぶらーと岩戸へ出うけお繃さんと酒宴最中うゆての合図ゃ九級能ゞ乳漫込んゞ鮮魚を拵せ妻への考ひ物黙言てハ居ら且

くるどりの
お勝半次郎浦
賀の小菊と訪
ふて身の上を
依頼を

ぬ故その返禮の二の久しーは商人ゞ出うみて来て
近所の藝妓よりをうみ生こうの大一座組と繰ぎの
煙草を寒うれ醉例生て翌朝遅く目ゞ覚め不図者るを
彼彩的と一ッ夜者退引きうぢ二度三度彼処を彼森の
孔花その翌日阪地より旦那ゞ吸つて知らせ申る外出
も世ぞを居さなれど矢張る地知る人のに龍ゞ連られ
ぬ此安ゞ旦那の身を入ッさの狀五十両の外加金を夜都で
添て作ようお帰庶物迄を居ともり入れば一端答ゞのお供

さんの家よりは入用居の後彩的とも活一合ゞ商金の
又十五で出演所の絶絶居素ゞ和知の遊清人貧乏活計
いゝて居ても義使のいる江戸男魂ゞ細い妻ゞ活さうゞアア
緩と逗留して分の落者とお決るさいと回情の由縁は
伝切らしくいゝを便りのちゝ茶お務い常次郎と共活は
彼彩吉への因縁を憑こて賣と家の末因果の種と撒るる
べー者は又お菊ゞ級の女丈ある九級花の清吉といる者い
其は茶江戸彩搭出雲所の西裏通り里活金春彩乃ある

よて書道某の一男なるゞその職業い名のごとくして性沿革の懶惰者賭博と妓楼よ日をくらし迎西の藝妓音曲の師匠なんどの家よ立入り男の美貌と口舌の罠よ婦女を引羅て赤い金切と金銀を貪り私の悪計と稼のごとくなせーちち商附同地金六所よ現弄あを店よ商ふ同業松家の猫り狼原化粧のお菅とゝる深蕩婦と別懇ゝあて悪びくよ俗らひーゞお菅の母い狼のゝあよ夫婦ゞいと分代を肥さんとする目的ゝて且那の口銭索をおゝ芝口一丁目の呉服店松

坂屋の壮丁谷三郎とゝる者ゞ貫至男ゝよ出る度毎来よ托付立寄る素振い狼のお菅よ心なる容子をそれとゝてとる毋渠ゞ来る日い先一盃と有合肴の一陶鐘ゝ絡ゝて凡渾の銅ふよ深き谷三郎を泥して盛干狼用くよ酒を交ゝりお菅と囲いせて季の衣服や除附の無心と貪るとまい接同るゝ毋もお菅と清吉ゞゝろゝた中い知りみゞゝ狼の庇護よて元年の夫婦ゞいと糊を呉徐もいえを寄ね振或疾松谷郎夫婦の者い親属の方よ不幸なりとて毒殺よ行る手留ち

中今青八最早斧と亦が来ぐき附刻るらぶとかの形古を雪
より引入を相撲の食物と楽と酒の落碑よ熟沈森込むを歌中
頃戸外と激しく打敲くをよお若い見と見し早面腿のゆり
うと徐く犯出で潤と開く郷却よ入来るその者い父母あい
ゆうで斧と亦が戦慄くお若と睦眦るぐう屋風湯仆し新
古の枕の色りよ撞と産し憤怒の眼を逆立うう此間
未く長ゆれべ甚き次の傷よ分解ると看て知りめ人ち

鋸山王石異訓初編巻下終

明治十五年十二月廿六日御届
明治十六年一月　出版　定價二十一

編集人　稲垣　浅草區
出版兼發賣人　勸文堂　榎本　本所區五番地
發賣人　牧町　同区同

東京　辻岡屋文助　木村文三郎　大倉孫兵衛　松　小　高

010190513047